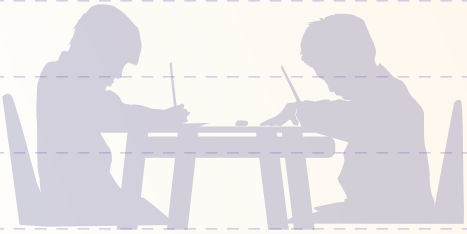
特集 「統一合判」中学入試レポート vol. 4

2016年入試の変化のもとで、

チャンスを生かす受験校の選び方

夏休みを終えて、9月以降、6年生が本格的な入試対策に取り組み始めてから、すでにひと月半。来年2月の入試本番まで残り3か月半となった。保護者の皆さんも、いよいよ併願校も含めて受験校を決めていく時期。年ごとに多くなる入試要項変更によって、“激動”が恒常化してきた中学入試だが、来春2016年入試はどうなるのか。目立った動きを確かめてみるとともに、そこで生まれるチャンスを生かす受験校の選び方を探ってみよう。



首都圏模試センター

来春2016年は"サンデーショック"揺り戻しの年。変化のなかに“合格のチャンス”が広がる

毎年、非常に多くの入試改革が行われることで激しく状況が変わってきた首都圏中学入試。例年、前年入試の直後から、翌年に向けての入試変更が次々と公表され、それぞれの学校の志望者数や難易度の変化、全体的な人気動向の変化などが、その翌年入試に向けての話題となっていく。

来春2016年の首都圏中学入試は、今春2015年の入試が、2月1日が日曜日にあたる、"サンデーショック"となった翌年の揺り戻しの影響が出る年。"サンデーショック"とは、日曜日には入試を行わない方針のプロテスタント校の多くが、この年だけは2月1日の入試を避けて翌2月2日に入試日を移行し、これによって女子学院、フェリス女学院、立教女学院、東洋英和女学院A、横浜共立学園Aなどの人気校の入試日が変わるため、とくに女子の入試の全体図が大きく変わるという、中学入試で数年に一度起こる大きな変動のこと。

一方でこの“サンデーショック”の動きに対して鎌倉女学院①、湘南白百合学園など、従来は2月2日に実施してきた入試日程を、逆に2月1日に変更したケースや、先のプロタスタント校の2月1日→2日入試への移行に同調して、(従来の併願パターンを崩さないよう）カトリック校ながら2月2日入試に移行した横浜雙葉、清泉女学院①などの影響も2015年入試では少なくなかった。

この“サンデーショック”の動きの反動（例年の入試日に戻る動き＝揺り戻し）が起こるのが、来春2016年入試ということになる。

さらには、こうした多くの私学の動きに合わせて、近隣エリアや周辺の人気競合校にも入試日を変更する動きが、毎回の“サンデーショック”の年とその翌年には出てくることが多く、これらの変化によって、人気が増加して難化が予想されるケースと、逆に合格のチャンスが広がることが予想されるケースが生まれてくることになる。

まず、来春2016年の首都圏中学入試では、これらの大きな変化のなかに、受験生と保護者にとっての“合格のチャンス”を見出すことができるという意識をもって、受験校を選んでいただくとよいだろう。

2020年からの「大学入試改革」が、日本の教育・学校・学力・入試観を変える！

そしてもうひとつ、視野を広げて見れば、ちょうどいまマスコミにも盛んに取り上げられるようになった「2020年大学入試改革」に象徴される日本の教育改革の動きが、来春2016年の中学入試の人気動向に影響を及ぼしていることが挙げられる。この先さらに加速する国際化、ボーダーレス化社会の到来に備えて、教育再生実行会議や文部科学省から新たな教育改革・入試改革の施策が打ち出されたことで、日本の教育の在り方そのものが大きく変化していこうとしているのだ。

5年後に迫った2020年から、「大学入試改革」が実施され、現行の「大学入試センター試験」を軸にした大学入試制度とは大きく変わるものになるということは、すでに多くの保護者がご存知のことだろう。かつての「共通一次試験」が導入された1979（昭和54）年から30数年間、現在の「大学入試センター試験」まで受け継がれてきた、“1点刻みの”得点で合否が決まる入試のスタイルと、

“サンデーショック”の今春2015年入試では2月1日から2月2日に入試日を移行し、来春2016年には、再び2月1日に入試日を戻す女子学院。

そこで測られる学力観そのものを変えてしまおうとする今回の「2020年大学入試改革」には、その実現の時期や形態、技術的な問題や高校教育現場の対応の可否などについて、現在の教育と受験の現場に関わる人々から賛否両論が寄せられている。

それでも、2020年東京オリンピック・パラリンピック開催という国家的にも大きな節目を迎える年をターゲットイヤーにして、文部科学省が実現しようとするこの大学入試改革（≒日本の教育改革）は、多少の時期の遅れがあったとしても、否応なく実現される運びとなることだろう。その最初の当事者が現在中学1年生となっている子どもたちであり、それに続く現在小学校6年生以下の子どもたちは、その先さらに本格的になる「新テスト」に直面する当事者に他ならない。

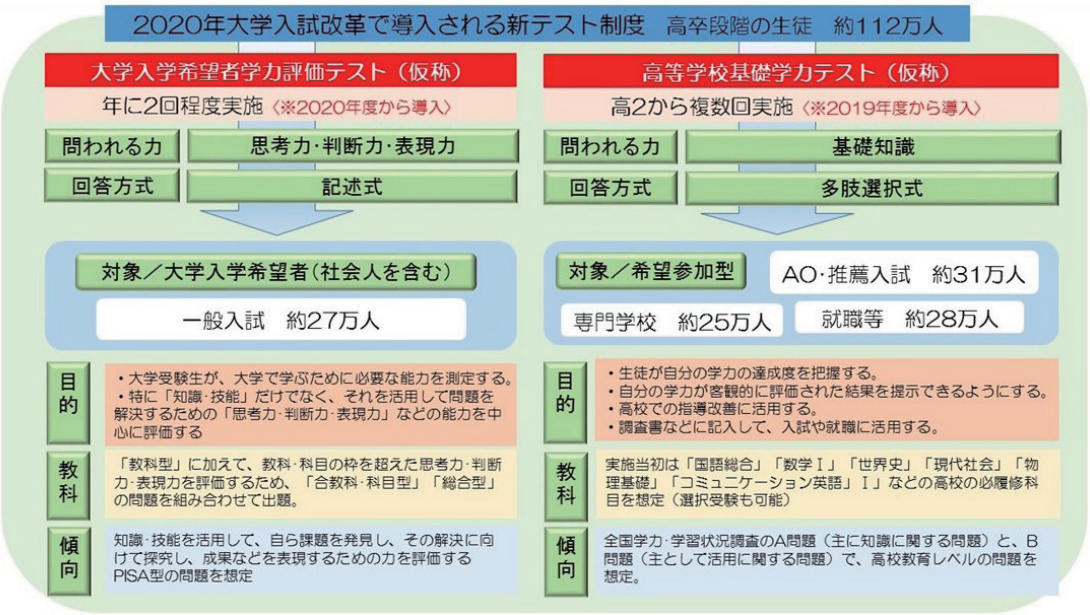
これまでの「大学入試センター試験」に代わって、新たに導入される「高等学校基礎学力テスト（仮称）」と「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」は、それぞれ、「高校段階で身に着けた基礎学力」と「大学に進学するために求められる学力」を測るための役割が課せられることになるが、そのうち後者では、「思考力・判断力・表現力」を問うために「記述式」の回答方式を中心とした、いわゆる“PISA型（＝OECD学力調査テストで出題されるような）”の問題が想定されている。

そしてこれらのテストは、ともにPCやタブレット端末での入力（回答）による「CBT方式」を前提に開発され、AI（人工知能）による採点のシステムが導入されるといわれている。

グローバル人材を育てる21世紀の教育は、私立中高一貫校がリードする！

さらに、いま日本の教育の最大の課題ともいわれるグローバル化のために、新たな大学入試の制度では、英語の4技能（「読む」「聞く」「話す」「書く」）を総合的に評価するために、英検やGTEC-CBT、IELTS、TEAP、TOEFL-iBT、TOEICなど、民間の資格・検定試験の活用がすでに検討されている。

実際には、導入の初年度にあたる2020年には、まだ現行の『学習指導要領』のもとで学んできた高校生が受験する形になるため、本格的な「新テスト」制度（システム）の完成は、高校では2023



文部科学省ほかの公開資料から編集部が作成

年度以降（現在の小学校4年生の大学受験時）ともいわれているが、すでに筑波大学などの国立大学や早稲田大学や上智大学などの私立大学で、先の「思考力·判断力·表現力」を問うような「PISA型」の出題や、英語の民間検定を判定材料に組み込む入試が試行的に行われ始めた。その意味では、現在の小6以下のお子さんたちは、まさにそうした「新たな大学入試」の最初の当事者ということもできるだろう。

そして一方では、小·中·高·大の各教育現場には「アクティブラーニング」の導入推進が新たに課され、いま教育の世界では、このアクティブラーニングの研修や、そのあり方についての議論が急速に盛んになっている。

いずれにしても、そうした日本の教育の大きな変化（明治の近代化以来最大の教育改革とも言われる）の節目の時期に中学～高校に進学し、やがて大学入試に挑んでいく現在の小学生と保護者にとっては、これから「中学～高校の6年間でどのような教育を受け、どのような力を身に着けるのか」が、わが子の将来にとって、かつてないほど重要な選択となってきた。

そして、そうした変化にいち早く柔軟に対応し、2020年からの大学入試改革で求められる「思考力·判断力·表現力」や、4技能のバランスのとれた高い英語力を育ててくれて、さらには大学を卒業して社会に出たときに求められる総合的な学力と

来春2016年入試に向けても人気の高い立教女学院。近い将来には「IBプログラム」の導入も検討しているという。

今年1月には創立130周年記念事業としてのキャンパスリニューアルがすべて完成した成城中。来春2016年入試に向けても、さらに人気が高まっている。

人間力（たとえば共生·協働·協調できる力とコミュニケーション力）、ICTスキルや課題解決力を育ててくれるのは、やはり私立中高一貫校だろうというのが私たちの解釈だ。そして、その意味では、現行の大学入試制度のもとでの大学合格·進学実績や、難関大学への合格者数·合格率のみを目安とした「学校選び」は、もはや時代にフィットしたものではないと考えるべきだ。

この先、わが子が中高～大学を卒業して社会に出る10数年後を見据えて、その時代に「より良く生きる」力を育ててくれる私立中高一貫校を上手に探し出し、進学させてあげることが、親（保護者）にできる最大のサポートであると考えていただきたいのだ。

「模試を受ける」ことで、最新の動きを知りわが子の合格のために役立てる！

20～21ページのコラムには、来年に向けての入試要項変更や学校改革の事例をもとにした、2016年入試の目立った動きをご紹介した。

こうした私学の動きや、人気動向の変化から、翌年入試には全体的にどのような傾向が予測されるのかを、保護者はできる限り知っておく必要がある。こうした数々の変化のなかには、必ず新しいチャンスや合格への突破口が生まれてくる。そして、それを探り出すには、正確で幅広い、最新の入試情報が必要になってくる。

激動の2016年入試で“合格”を得るために、模試を上手に利用しよう！

～「継続して受ける」ことで学力を育て、自信をつけることができる！～

首都圏模試センターの「小6統一合判」テストも、この10月12日で第4回を迎えた。6年生では12月までに残り2回、計6回の模試が行われるが、この機会を十分に活用して、来春2016年入試での“合格”のステップにしてほしいと思う。こうした模試の上手な利用法は、何より「継続して受ける」ことだ。それによって、

①毎回の成績の推移と、受験生のなかでの自分の位置を知り、受験勉強の成果（手ごたえ）を確かめることができる。

②志望校の最新の入試情報と人気動向を知り、ベストの受験（併願）作戦を組み立てていくことができる。

③毎回のテストで力試しができると同時に、中学入試の“合格”に直結する実戦的な学力を育てることができる。

といった、いくつものメリットが得られる。そのためにも、毎回のテストでは、成績表や結果判定などのアウトプット資料をよく確かめ、試験問題や答案には何度も目を通して、しっかりと「おさらい」をしておく必要がある。

また、最近の小学生の皆さんは、まだまだこういった長時間のテストを緊張感のある状態で受けることに慣れていない。これまでにもお通いの塾での内部テストは何度も受けてきたと思うが、会場が変わって、周囲に初めて顔をあわせる子どもたちがいるなかでの（＝入試本番のような）テストには、また違った緊張感がある。こうした雰囲気にできるだけ早く慣れて、入試の本番でも感じるような、この緊張感も味方につけて、十分に力を発揮できるようになっておきたい。

継続して模試を受験することで、志望校に向けた課題を発見し、入試本番に向かう励みにしてほしい（写真は9月「統一合判」会場のひとつ海城中の学校説明会）。

保護者の皆さんは、毎回の成績や志望校判定に一喜一憂するのではなく、客観的に結果を受け止め、それをプラスに生かすための工夫をしてほしい。どのような結果（成績）であったとしても、その都度お子さんを励まし、学力的に成長するための材料にすることを心がけていただきたいのだ。

また、テスト会場での説明会など、最新の入試情報が聴ける機会には、必ず参加して説明を聴いておくべきだろう。

こうして親子で上手に模試を利用することができれば、継続して受けることがやがてお子さんの自信にもつながり、来る2016年入試での“合格”への、力強いステップになるに違いない。

こうした最近の中学入試のリアルな実情を把握し、それをクリアできる力を身につけるためにも、保護者の皆さんには、お子さんが「統一合判」のような大規模なテストを受験する機会に、最新の中学入試情報をキャッチして、それをお子さんの“合格”に役立てていただきたいのである。

とくに次回11月と、最終回12月の「統一合判」では、それまで蓄積してきた各校の志望動向から、いよいよ最終予想が固められていく時期となる。

この2回の模試を受けると同時に、そこでこのような情報をキャッチしていくことは、万全の合格作戦を立てていくためにも、最重要の課題といってもいいだろう。

模試を受けることで、第一志望への課題と、ベストの併願作戦を組み立てるヒントを探ろう！

～「継続して受ける」ことで、合格へのチャンスが見えてくる！～

翌年の中学入試に挑む6年生が、模試を受けることで得られるメリットは、前のページのコラムで述べた通りだ。さらにこれを、親の立場で生かすべきことにしぼって、以下にポイントをまとめてみよう。

●第1志望校との距離を測り、課題を見つける

毎回の合格判定の結果や成績をもとに、お子さんの第1志望校の合格の目安（＝入試予想難度）と、現時点での成績とを考え合わせて、その学校への合格可能性や、そこまでの距離を測り、残された時間で何を重要課題として、親子それぞれが何をすべきかを検討する。

同時に、11月以降の模試の結果が出る頃には「受験する学校を確定する」気持ちで、併願校選びのための情報収集や検討を進めておく。

●豊富な経験を生かしたアドバイスを聞く

毎回の模試の会場では、入試に向かうためのアドバイスが聞ける、保護者向けの説明会（講演）が行われていることが多い。そこでは、中学入試に関する豊富な知識と、実際の受験に関わった経験･事例をもつ講演者から、入試本番に向けての準備や、入試の最中にも役に立つ話を聞くことができる。

また、単なる情報だけではなく、わが子のサポート役を務めるなかで、迷いや悩みをもつ保護者を励まし、力づけてくれるような話も聞ける。そうした機会には、積極的に足を運んで、勇気や元気をもらうといいだろう。

●志望動向の変化による予想･分析を生かす

毎回の合格判定では、その月の志望動向（志望者数や成績分布）などをもとに、入試予想が立てられ、それが翌月の合格判定に生かされる。

そうした志望者数の数字やデータは、個々の成績表（アウトプット）にも反映される。それぞれの志望校の動向は、個々の成績表を見ることでわかるが、もうひとつ、全体状況のなかで、それぞれの動向がどうなっていくかという予測・分析については、やはり専門家の意見を聞いたり、配布された詳細な資料を見ることが必要になる。

それまでは気がつかなかった視点や、見落としていた情報を提供してくれることも多いはず。

「統一合判」模試の父母会（入試に関する説明会）では、最新の入試情報に加えて、変化する教育事情についての説明を聞くこともできる。

この時期までに、おそらくほとんどの家庭では、わが子の第1志望校、第2志望校については、詳細な情報を集めて、その学校についての理解を深めていることだろう。しかし、第3志望以下の併願校については、まだ十分な情報収集ができているとはいえないのではないだろうか。

そうした併願校選びに際しては、これまで持っていた知識や視点での見方だけではなく、新たな知識や視点に気づかせてくれる専門家の意見が役に立つことが多い。それまではわが子に午後入試を受験させることを考えていなかった保護者が、模試でのアドバイスを聞いたことで、そのメリットや意味を知り、入試後になってみると「午後に受けておいてよかった…」と思えるようなことも多いのだ。

●併願校を選ぶ多様な視点と最新情報を生かす

上に述べたことは、入試状況を知るためだけではなく、それぞれの学校の教育内容や成果を、もっとよく知るためにも大切だ。

とくに併願校を選んでいく際には、ややもすると、古い情報や評判にとらわれて、選択の幅が狭くなりがちなことも事実。数年前までは、まだ成果の出ていなかった私学が、最近になって目覚しい成果や実績を上げ、あるいは急速な変化・発展を遂げて、今後が大いに期待できる学校になっているケースも非常に多いのだ。

最新の学校情報によって、そうしたことに気づかせてくれるのも、模試を受けることで得られる大きなメリットということができるだろう。その意味では、会場での保護者向けの説明会（講演）や配布資料に、しっかりと耳を傾け、目を通していただくことが望ましいと強調しておきたい。

また変化が起こる、2016年首都圏中学入試の状況を的確につかむ！…その①

7月の「統一合判」の際の「中学入試レポート」でも一度ご紹介しているが、ここで再度、来年2016年入試に向けての入試要項変更や学校改革の事例をもとに、目立った動きや人気動向をご紹介しておこう。

●女子は“サンデーショック”の揺り戻しの年

来春2016年の首都圏中学入試は、今春2015年入試で2月1日が日曜日に重なった"サンデーショック"の揺り戻しの年。今春は日曜日の入試を避けて、2月1日から翌2月2日に入試日を移行した多くのミッションスクールが、再び入試日を2月1日に戻す。同時に、これらの動きに合わせて、周辺の人気競合校にも入試日を変更する動きが出てくることになる。これらの変化にともない、人気が増加して難化するケースと、逆に合格のチャンスが広がるケースが出てくることに注意しておこう。

●今春共学化した東洋大学京北、来春共学化する法政大学第二をはじめ、有名大学の付属校が人気増加へ。

今春2015年から白山の新キャンパスに校地移転し、男子校から共学校化を果たした東洋大学京北（旧・京北）は、来春2016年に向けてもさらに人気が増加。

また来春2016年から共学化する法政大学第二（男子校）は、すでに現時点でも女子受験生に大人気であることに加え、男子の志望者も増えている。神奈川の新都心として急速に発展しつつある武蔵小杉という好立地に新校舎も完成し、新たに恵まれた教育環境も整えているだけに、今後さらに人気が高まることが予想される。

この他にも、再来年2017年に豊洲に移転する芝浦工業大学中（男子校）をはじめ、早稲田大、慶應義塾大、明治大、法政大、青山学院大、成蹊大、成城大、日本大、東海大などの各付属中が来春2016年に向けて人気増加の傾向を見せている。

2016年春から共学化する法政大学第二では新校舎建築工事が順次進められている（写真は完成した時計塔本館の中庭）。

やはりここにも「2020年大学入試改革」の影響があるのか、今後の人気動向が大いに注目される。

●横浜英和女学院が来春から青山学院大学と教育提携。校名は青山学院横浜英和に！

横浜英和女学院（横浜市。女子校）は、現在の小6受験生が入学する2016年4月から青山学院大学の系属校となり、校名を「青山学院横浜英和中学高等学校」と変更する。さらにこの提携をステップに、2018年度の中学1年生（現在の小学校4年生）の入学時から共学化に踏み切ることを昨年から公表している。

中学受験生と保護者にとっては気になる「青山学院大学への推薦進学」は、原則として2016年以降の入学者は、一定の条件を満たせば希望者全員が青山学院大学に推薦で進学できる見通しとされている。一方では、それ以外の大学への 受験～進学の道も開けている形になる。

同校は今春2015年入試でも大きな人気を集めたが、それは、現在中1となった今春受験生も、青山学院大への推薦は上記に準じる扱いになると昨秋に公表したことによる。2012～2013年にかけて新校舎も竣工し、新たな教育環境も整っているだけに、人気上昇の傾向は続きそうだ。

●公立中では千葉県立東葛飾が中学を新設。私立では本庄第一が中学を新設へ！

すでに昨年から公表されてきたことだが、来春は千葉県立東葛飾高が中学を新設し、首都圏に公立中高一貫校がもう1校増えることになる。同校は千葉県の公立高校では、県立千葉、県立船橋などとともに県下で最難関レベルの公立トップ校。これまで公立中高一貫校の存在しなかった千葉の常磐線エリアで大きな人気を集めることは間違いない。同高校は2014年から「医歯薬コース」も開設して注目を集めている進学校だけに、同じ千葉県や埼玉など近隣エリアの私立中高一貫校も大いに刺激を受けて、新たな改革を打ち出すケースも増えている。埼玉栄の「医学クラス」新設なども、そうした一例ということができるだろう。

また、私立では本庄第一（埼玉県本庄市・共学校）が中学を新設予定。学園の理念に「響生（きょうせい＝影響を与え、影響を受け、柔軟さと豊かさを育む）」を掲げ、埼玉県と群馬県の県境に近い立地と、そのエリアの受験動向や保護者のニーズも考慮して、必ずしも中高6年間一貫の体制にこだわらず、併設の本庄第一高校への進学と他の県立・私立高校への受験体制との両面を備えた中学校としてユニークな教育を展開することで、近隣エリアに新しい中学受験市場を広げてくれる期待がかかっている。

また変化が起こる、2016年首都圏中学入試の状況を的確につかむ！…その②

ここでも、来年2016年入試に向けての入試要項変更や学校改革の事例をもとに、目立った動きや人気動向をご紹介しておこう。

●三田国際学園、開智日本橋学園、かえつ有明など「21世紀型教育」をすでに実践する私学がさらに人気増加へ。

今春2015年入試から共学化し、今後のグローバルな社会で活躍できる力を育てるための「21世紀型教育」への大胆なシフトをして大人気を集めたのが、三田国際学園と開智日本橋学園。「2020年大学入試改革」が世間の注目を集める以前に、時代の変化を先取りする教育スタイルを導入した先見性と実行力に、敏感な保護者が期待を寄せたということだろう。

三田国際学園（旧・戸板。女子校）はリベラルアーツ教育を実践して思考型の学びを追及する本科と、一条校でありながらインターナショナルクラスを併設して、アクティブラーニングをすべての授業で取り入れて、独自のグローバル教育の実践をすでにスタートさせている「21世紀型教育」先進校。インターナショナルクラスでは、ネイティブスピーカーによるイマージョン教育を行う。

開智日本橋学園（旧・日本橋女学館。女子校）は、グローバルリーディングクラス（インターナショナルコース）と、リーディングクラス、アドバンスドクラスを併設し、21世紀型学力（探究力・創造力・発信力）を育成するために独自のアクティブ・ラーニング（「探求」授業）を推進。イマージョン教育も導入し、グローバルリーディングクラスでは、国際バカロレアのMYP（中等教育プログラム）とDP（大学進学に向けたディプロマプログラム）を導入する。

今回の本誌の「私学の魂」で紹介している、かえつ有明も、かつての嘉悦女子が現在の江東区に校地移転して共学化してから10年目を迎え、私学のなかでも出色のグローバル教育と「21世紀型学習スタイル」を次々と導入～実践して注目を集めている。

さらに、日本初のハイブリッド・インタークラスの開設をはじめ、ダイナミックな改革を推し進める工学院大学附属や、カナダと日本の両方の高校卒業資格が得られるダブルディプロマコースを今春開設した文化学園大学杉並など、「21世紀型教育」を導入～推進する私学が、こぞって注目と人気を集めている。

いずれもすでに7～9月の「統一合判」模試での志望者も急増傾向。今後の人気動向に注目するとともに、将来性に大いに期待したい。

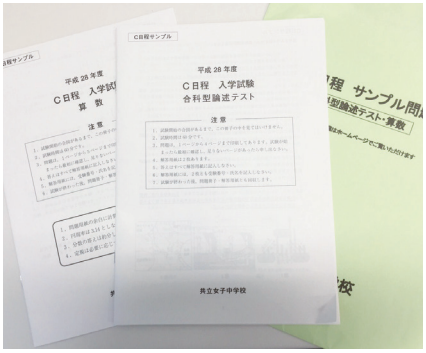
●続々と増える「英語入試」と「適性検査型入試」。中学入試の新市場が拡大か！

今春2015年入試では、東京都市大学付属や東京都市大学等々力、桐蔭学園などの人気校が「英語（選択）入試」を新たに導入し、何らかの形で「英語入試」を実施する私学が30校以上に増えたことが話題になった。来春2016年入試に向けては、さらに「英語（選択）入試」実施校が増加している。それを早くから公表してきた山脇学園、大妻中野をはじめ、その後も続々と「英語入試」新設が公表されており、最終的には50校近くが実施に踏み切ることになる見通しだ。こうして、帰国生入試だけでなく一般入試にも「英語（選択）入試」導入の動きが進むことで、英語の学習を経験してきた小学生にとって、私立中高一貫校への門戸が広がってきたといえるだろう。

また、公立中高一貫校の志望者が「力試し」や併願校として受験することのできる、私学の「適性検査型入試（思考力入試・PISA型入試）」も、来春2016年入試に向けて急速に増加しつつあり、最終的には80校近くの私学が、自校の複数回の入試のなかで1回は、こうしたスタイルの入試を実施することになりそうだ。

これも「2020年大学入試改革」で求められるようになる「思考力・判断力・表現力」を中高の6年間で十分に育てていこうとする多くの私学からのメッセージと解釈するべきだろう。

共立女子が2月4日のC日程入試で「記述型入試」を導入。品川女子学院も2月4日の第3回入試で「4科目・表現力総合型入試」を実施。光塩女子学院が、これまで第2回のなかで選択実施してきた「総合型」入試を独立させて入試回数を増やし、来春は2月1日に第1回「総合型」入試として新設することなども、各私学のそうした教育姿勢の表れと理解して、そうした新しいスタイルの入試にも積極的にチャレンジしていくとよいだろう。



来春2016年から2月4日C日程を「記述型入試」とする共立女子では、9月19日の学校説明会から、参加者にサンプル問題を配布している。